留学で広がる世界：矢矧さんが語る、インド留学のリアルな経験

「初めての海外がインド」 ― そんな挑戦が私を変えた ―

矢矧さん(*)は、島根大学の修士課程で研究を進める中、所属している研究室の指導教員(ヘマンス先生)とインド工科大学ハイデラバード校 （IITH） の教員（スハンヤ先生）が、JICA FRIENDSHIP2.0 プロジェクトでの共同研究者同士であるという繋がりから、IITH 教員の元へ、2024 年 11 月から約1か月間留学しました。人生で初めてパスポートを作って出た海外がインド。それも1か月の滞在。そこには、IITH で研究の最前線を体験しながら、新しい環境に適応し、多文化の中で成長する日々がありました。

異文化の中での研究体験

矢矧さんは、研究室で「ラマン分光法」を活用した研究を行っていました。IITH には最新のラマン分光装置があり、それを使いながら研究を進めることができました。

「自分の所属大学にもその装置はありますが、少し古い装置で、修理が必要な時があり、その分、修理の技術は身に着くのですが、使用できない時があります。IITH の装置は新しいので修理時間が必要ないようで、いつでも使えて便利でした。

また、研究倫理の面でも、日本とは異なる柔軟さがあり、現地のボランティアの協力のもと、スムーズに研究を進めることができました。

丁度 IITH に滞在中に、自分を受け入れている IITH の化学工学科主催で 3 日間の国際学会がキャンパス内でありました。日本を含む、世界のいろいろな国の研究者が集い、学生も多数プレゼンテーションやポスターセッションをしていました。夜キャンパス内のレストランで、学会参加者らと会食しながら交流もできました。自大学とは異なり、研究を重視している大学だからこその環境だなぁ、とつくづく思いましたし、貴重な経験ができました。」

生活面でのチャレンジと発見

「キャンパスに着いて最初に驚いたのは、トイレにトイレットペーパーがなかったことでした。」

矢矧さんにとって、インドでの生活はまさに「サプライズ」の連続でした。シャワーやトイレの設備、食事、時間感覚──日本では当たり前のことが、インドでは大きく異なっていました。

でも、留学前から、「海外に来た以上、その国の文化に適応するしかない。日本のやり方を押し通すのではなく、現地の流儀に合わせて生活してみよう」と心に決めていたので、違いも乗り越えることができたそうです。

そんな環境の中でも、寮の近くの体育館でインドの学生と卓球やバドミントンをしたり、学食で偶然隣に座ったインド人学生と会話したりと、異文化交流の楽しさを実感する場面も多かったそうです。

英語での挑戦と成長

IITH では英語が共通言語ですが、インド英語のアクセントに最初は苦労したといいます。

「何度も聞き返さないと理解できず、正直大変でした。でも、繰り返し聞き取ろうと努力するうちに、少しずつ慣れてきました。」

英語を学ぶのではなく、実際に使う環境に身を置くことで、語学力だけでなく、異なる文化の人と意思疎通を図る力も磨かれたと語ります。

留学を通じて得たもの

「研究に対する情熱がすごかったです。インドの学生は土日も研究室に通い、朝食後には『今日も研究室行く？』と聞かれるのが当たり前でした。」

研究への姿勢、時間感覚、異文化の中での生活適応力──インド留学で得たものは、単なる学術的な知識だけではありませんでした。

「この経験を通じて、多様なバックグラウンドを持つ人と関わる力がつきました。将来、社会に出たときに、異なる文化を持つ人たちと協力して働く場面があると思います。そのときに、この経験が必ず活きると感じています。」

留学を考えている人へ

「もし、学生のうちに海外へ行く機会があるなら、ぜひ挑戦してほしいです。」

旅行ではなく、留学だからこそ、現地の文化や人々と深く関わることができます。矢矧さんにとって、インドでの 1 ヶ月は、驚きと学びに満ちた貴重な時間でした。

「最初は不安かもしれません。でも、終わった後に振り返ると、すべてが大きな成長につながっていると実感できるはずです。」

あなたも、世界に飛び出し、新たな自分を発見してみませんか？

(*) 矢矧桃子（ヤハギモモコ）さん ： 島根大学　自然科学研究科　修士課程 2 年（IITH 留学当時）

研究室のみなさんと

研究室のみなさんと